特253
938

昭和革新の原動力
世界隱とは何か

蹴洲編著

始

特253
938

708

はしがき

「葉隱」と云ふのは何？を知らないと云ふ事は最早や現代日本人としては一種の恥辱である。

それ程「葉隱」は全日本化して居り同時に精神日本の將來を決定すべき迫力を持つてゐる。

今や我日本は完く非常時の頂點にあり、いつ爆裂するか知れない國際的危局に面してゐる。吾等は常に腹を据へて居なければならないのであるが、その腹の据ゑ方を最も適切に教へるものが即ち「葉隱」だと云つても過言ではない。

「葉隱」はその昔佐賀藩の志士山本常朝が主君の死に殉死すべきを藩の法度によつて禁ぜられ、穏世して居たのを、同じく佐賀藩の志士田代陣基が之を山家に訪ひ二人が何十年間に亘つて、日夕語り合つたのを記した筆錄である。だからその分量から云つても質から云つても誠に多量多岐に亘つて居るが、本書はその中最も重要な點のみを抄錄し現代的に意譯したものである。

全卷に漲る灼熱の氣魄と、鐵繰線の樣な力を持つた一言一句は吾等の心底に迫るものがあり讀む者をして、自然と心膽を錬へしむる慨がある。

著者識

大東亜図書館

目次

一、葉隱の由來とその著者……五
一、葉隱とはどう云ふ意味か……七
一、葉隱の內容と文章……九
一、葉隱精神の神髓……一〇
一、葉隱魂と日本魂……一四
一、葉隱精神の三性格……一七
一、葉隱の感化……二一
一、葉隱の本文……二四
一、武士道は死ぬこと、毎朝毎夕常住死身になれ……二四
一、柳生流兵法の極意は死ぬ事……二五
一、敵を討取ることよりも、主君の爲に死んだが手柄……二七
一、首打落されても一働き出來るもの……二七
一、大野道賢火あぶりに屈せず黑焦げになつて檢使を突殺す……二八
一、進む者には神佛の加護がある……三〇
一、佛法と武士道に分別はない、分別がつくと臆病になる……三一
一、九州者は魂が一つ足りない……三一
一、心を靜むれば敵前も薄月夜……三二
一、首を打落され、同時に人の首を切る……三三
一、戰場の使者は骨一つで濟む、男振り口上は役に立たぬ……三四
一、死ぬるばかりぞ誠なりける……三五
一、戰場で分別が出來ると敵は敗れぬもの……三六
一、主人より無理さるゝ時にするが眞の奉公……三六
一、陣屋での嗜み、ちよつと座るにも敵陣近く……三七
一、敵の强弱の見樣、俯向いた敵は强く仰向いた敵は弱い……三八
一、すはといはば眞先、自分より先には一人もやらぬ……三九
一、廣瀨傳左衛門十二三歲の頃豪膽人相見を僻易さす……四〇
一、龍造寺隆信の膽略「毒なればとて何程の事」……四一

一、鍋島直茂薩摩から送つた龍造寺隆信の首を突返す……四一
一、先づ篤と身命を主人に奉り、内に智仁勇の三德を備へよ……四三
一、毎朝拜の仕樣は先づ主君、親、それより氏神守佛とせよ……四三
一、生きながら幽靈となつて、二六時中主君を守り國家を堅めよ……四四
一、名利の眞中、地獄の眞中に駈入りても主君の御用に立て……四五
一、奉公は好き過ぎて過ちあるが本望、忠の義のと理窟はいらぬ……四六
一、上司の事は批判せず、人が思ひ付くやうに褒めて置くが忠義……四七
一、立身加增も速きを望むな、遲速共に諸人うけがふやうに……四八
一、思ひ死にするが戀の極致、主從の間もこの心で濟む……四八
一、相馬家臣猛火の中に飛入り、主家の系圖を腹中に收めて燒死す……四九
一、何事も成らぬ事はない、一念起ると天地をも思ひほがす……五〇
一、苦勞をした者でないと性根が据らぬ、若い中に苦勞せよ……五一
一、名人が出ぬのは時代の罪ではない、人が精を出さないのが殘念……五三
一、意地は刀の樣な物、研ぎすまして鞘に納め置き時々出して見よ……五三
一、雲居和尙、山賊に遭ひ妄語したとて立歸つて金を與へ、敎化す……五六

「葉隱」の由來とその著者

今を去る二百二十年程前佐賀藩に山本神右衞門常朝と云ふ士が居た。常朝は丁度佐賀藩第二代目の藩主（鍋島家では鍋島直茂を藩祖、勝茂を一代、光茂を二代の藩主としてある）鍋島光茂公に使へて居たが、常に鍋島の御家を己が一身に荷ふ覺悟を以て忠勤を勵み、主君の信任と寵遇は殊の外厚かつた。元祿十三年五月十六日光茂公が逝去したとき、追腹する決心であつたが當時追腹法度の爲剃髮して出家し、當時有名な高傳寺の了爲和尙に就いて受戒し、北山黑土原の草庵に入つて主の菩提を弔つた。

かくして常朝が遁世してから十年を經た頃同じく佐賀藩士田代又左衞門陣基と云

ふ武士が草庵を訪ねたが、常朝の意氣見識にすつかり共鳴し、矢張り自分も近くに草庵を結んで常朝と朝夕語り合ふ樣になつた。かくして常朝がポツリポツリと吐き出す言々句々を筆記し、それが積り積つて七ヶ年目、享保元年に完成したのが即ち「葉隱」である。

當時は丁度元龜、天正の戰國時代を降る百數十年の頃で、文運の興隆に伴ふて世は漸く輕佻浮華の風が萠し、武士道が萎靡頽廢せんとする元祿時代の直後であつた。日本文化史上に於ては明治時代と共に劃期的な黃金時代を現出した元祿時代には彼の有名な赤穗義士の快擧等があり武士道の精華も發揚されたけれど、一面に於て世は文弱に流れ、拜金的物慾が深く人心にしみ込まんとする傾向があつた。そこで經世濟民の見地から日本特有の道德たる武士道を說き、世道人心の革新作興に資せんとする學者も少くはなかつた。山本常朝は心から士風の萎靡頽廢を歎いて、この事を話す度に涙を流して居たと云ふ。

常朝は當時佐賀藩隨一の學者として上下の尊信を受けて居た石田一鼎に師事し、屢々その門を叩いて薰陶を受けたため、一鼎の武士道的儒敎思想に負ふ所が深かつた。それと共に常朝には又彼獨自の思想信念、即ち「御家一大事の出來候時は進み出で、一人も先にはやるまじ」との勇猛心、「あつぱれ我等一人ならでは」との献身的忠誠の心意氣を堅持し、それ等が渾然融合して常朝の偉大なる人格を築き上げたのであつた。

葉隱とはどう云ふ意味か

葉隱と云ふ書は一體どう云ふ意味から名づけられたかに就いてはいろ〳〵の說がある。西行法師の「山家集」に

寄殘花戀　はがくれにちり止まれる花のみぞしのびし人にあふこゝちする

と云ふ歌があるが、丁度寶永七年、山本常朝の山家を田代陣基が初めて訪ねた時

浮世から何里あらうか山櫻　　常朝（古九）

白雲や只今花にたづね合ひ　　陣基（期醉）

の問答句を交はし、陣基が世を忍ぶ隱士常朝の德を慕ひその談話を求めて訪ねたといふ氣持からこれらの歌と句を照し合せ、西行の歌の初句「はがくれ」と云ふ語句をとつたのであらうと云ふ說もあり、又その頃常朝の草庵近くには「はがくし」といふ柿が多く繁つてゐた處からその柿の名から出たものであらうと云ふ說もある。

しかし、これは當時の環境と心境とから名づけられたものであらうと云ふ說が最も多い。即ち北山の木の葉隱れに語つたり聞いたりしたものだから、その時の二人の環境と心境から、「はがくれ」と云ふ書名にしたであらうと云ふのである。それは丁度現代でもよく「綠陰閑話」とか「山中秘聞」などと云ふ書名が名づけられるのと同じ氣持ちから出たものである。或る寫本には「葉隱聞書」としてある等から

考察せば或は、この方が最も正しいものであらう。

葉隱の內容と文章

葉隱は全部十一卷から成り、教訓や實話逸事などが雜然と記載されて居り、その項目は千三百餘節に達してゐる。

山本常朝の談話が中心となつてゐるが、常朝の談話ばかりではなく金丸氏話、馬渡氏話、同書附、中野氏話、助右衞門殿話、蒲原彌右衞門話、横尾氏話、湛然和尙物語など約四十人餘りの談話者を擧げてある。又栗山書附、透運聞書、集書の內寫など記錄類を集めたらしいものもあり、その他「直茂公御話」「勝茂公御話」や藩主の年譜「茂宅聞書」「柴田聞書」なども收錄されてゐる。これ等の人々の話は、それ〴〵直話もあり、又常朝を通じての話もあらうと思はれる。

葉隱の文章は頗る率直で少しの粉飾もなく獨特の單純味があり、徹頭徹尾簡潔ではあるが意味深遠で全卷を通じて一脈の熱意が感得される。言葉遣ひも誠に奔放で綺麗な熟語を羅列するのでなく強く自由に端的に率直に云ひたい事を云つてゐるのである。

葉隱精神の神髓

「葉隱」の根本精神は一言にして云へば「まこと」と、その表現である。即ち「まこと」の縱の表現である「忠」であり、横の表現である「和」である。「葉隱」の本文に現はれた四誓願には

一、武士道に於て、おくれ取り申すまじき事

一、主君の御用に立つべき事

一、親に孝行仕るべき事

一、大慈悲を起し人の爲になるべき事

とあるが、忠孝仁義の提唱に外ならない。これ等の源泉である中心思想は「まこと」即ち忠誠であつて「葉隱」全卷に横溢してゐる武勇の觀念も單なる武勇のための武勇でなくひたすらに主君に對する忠誠の一要素としての武勇である。

「葉隱」の卷頭には「葉隱の縮圖」とも見るべき「夜陰の閑談」に最も明快に忠誠の根抵を說いてある即ち

「御家來としては、國學心懸くべき事なり。今時國學目落しに相成り候。大意は御家の根元を落着け御先祖樣方の御苦勞、御慈悲を以て御長久の事を本づけ申す爲に候」。(卷一四誓願寫總論參照)とあつて、御家來としては國學に心懸くべき事である、その國學と云ふのは、今日の國語國文學の意味でなく、藩の歷史を初め、傳統的精神風習等凡ゆる傳統を含んだ廣義の學問である。而して佐賀藩が他藩に勝れて立派

なお國柄である事を知れ、そして報恩の念を起せ、報恩の念が湧いたならば、身命を抛つて奉行し、御家を一人で荷ふ覺悟を以て主君の爲に忠誠を盡せ、といふのが葉隱精神の根本である。

葉隱精神は徹頭徹尾献身的犧牲の精神であつて、山本常朝は隱遁生活の中においてすら次の如く血涙を絞つて語つてゐる。

「浪人切腹仰付けられ候も一つの御奉行と存じ、山の奥よりも、土の下よりも、生々世々、御家を歎き奉る心入れ、これ鍋島侍の覺悟の初門、我等が骨髓にて候」

（卷一四誓願寺總論一參照）

更に徹底した言葉は、常朝の師湛然和尙の「殿樣殿樣」の名號である。湛然和尙曰く

「武士たる者は、忠と孝とを片荷にし、勇氣と慈悲を片荷にして二六時中、肩の割入る程荷ふてさへ居れば侍は立つなり。朝夕の拜禮、行住座臥「殿樣殿樣」と唱ふべし、佛名眞言に少しも違はざるなり」（卷六・四誓願寺總論三參照）

とある樣に鍋島侍の名號は「殿樣殿樣」であり、殿樣中心主義が「葉隱」の神髓である。

更にこれを横の方面から見れば「諸人一和」の觀念がその骨子をなして居る、即ち

「諸人一和して天道に任せて居れば心安きなり。一和せぬは大義を調へても忠義にあらず。朋輩と仲惡しく、かりそめの出會にも顏出し惡しく、すね言のみ云ふは胸量狹き愚痴より出づるなり。自然の時の事を思ふて心に叶はぬ事ありとも出會ふ度毎に會釋よく他事なく、幾度にても飽かぬ樣に心を附けて取合ふべし」

と敎へてゐる。又

「何事も君父の御爲、又は諸人の爲、子孫の爲とすべし。これ大慈悲なり」。

「人に意見をして癖を直すと云ふは大切の事、大慈御奉行の第一にて候。即ち諸朋

輩兼々入魂をして癖を直し、一味同心に御用に立つ所なれば御奉公大慈なり。」
とあつて、結局心を協せ人を導いてお家の爲、お國の爲を圖ることが慈悲であると云ふのである。

更に「葉隠」の根本精神を性格的に見れば、それは「負けじ魂」であり、「頑張り」である。即ち武士道においておくれを取らぬ事である。こゝに於て、忠、孝、武士道、慈悲即ち四誓願が縦と横とから見、道徳的方面と性格的方面とから見た全面的な「葉隠」の根本精神である。と云ふことが出來るのである。

葉隠魂と日本魂

葉隠は直接鍋島侍の本領を説いたものであり、鍋島家の處世訓だから、日本の大義名分論に觸れて居ないが、その根本精神は、とりもなほさず日本精神と相通づる

ものである。封建時代に於ける殿様は藩の士民にとつては殆んど絶對的存在として崇敬の對象であつたので、鍋島侍の崇敬の對象は殿様であつた。

この絶對者に對する宗教的信念に近い崇敬の觀念こそ傳統的葉隠精神の結晶であつて形は變つても質に於ては、上御一人に對し奉る尊崇の國民的觀念と同じである。鍋島侍の殿様中心主義は取りも直さず日本國民としての皇室中心主義であり、「殿様、殿様」の名號は即ち今日に於ては「すめらみこと、すめらみこと」の奉頌である。

「武邊は敵を討取りたるよりは、主の爲に死にたるが手柄なり」

「我が身を主君に奉り、速かに死に切つて、幽靈になりて二六時中主君の御事を歎き、事を整へて進上申し、御國家を堅むると云ふ所に眼を着けねば、奉公人とはいはぬなり」。

とある如く常に主君第一、御家第一主義で、生くるも死ぬるもたゞ一筋に主君のた

めである。否生き乍ら死んで幽靈になつて二六時中君を守護し主君に忠誠を捧げると云ふ眞心は、我が國代表的武門の萬葉家人大伴家持が歌つた

海行かば水づく屍、山行かば草むす屍
大君の邊にこそ死なめ顧みはせじ

と相通づるものである。又「葉隱」冒頭の「御家來としては國學心懸くべき事なり云々」は、これを現代日本人として解釋すれば「日本國民としては國史を理解し尊重せよ」といふ事であり、即ち「國史に還れ」といふ事である。「御家の根元を落着け」といふのは「日本建國の由來を會得せよ」といふ事である。即ち「建國精神に還れ」といふ事である。「葉隱」が指導精神の根柢をこゝに置き、更に「諸人一和」を說いた事は、その本質に於て今日の日本精神の指導原理と全然その行き方を一にするものである。

「殿樣中心と諸人一和」は今日の「皇室中心と舉國一致であり、共に純眞無雜、清く正しく强く節義を重んじ廉潔を尙び犧牲的精神を以て每日〳〵一死以て君國に報ずる、一方には大慈悲を念願とし所謂「武士の情」を嗜み、人に對してはたとひ心に叶はぬ事があつても、一旦緩急の場合を思ふて御國のために、總ての人と和合し、又他人の不仕合せの時には、特に親切を盡すといつた樣な日本人の特性が「葉隱」に强調されてゐるが、これは、とりもなほさず皇國精神や神ながらの道に一致するのである。こゝに「葉隱」の本質的な、そして永久的普遍的な尊さがあり、「葉隱魂即ち日本魂」の眞意義があるのである。

葉隱精神の三性格

「葉隱精神」を性格的に檢討して見ると次の三特色を見出す事が出來る。即ち

一、眞劍に

二、頑張れ

三、仲好く

端的に卒直、眞劍であり、負けじ魂を以て徹底的頑張りを發揮し、しかもお互に犧牲的精神を以て禮讓の德を守り仲よく一致團結することが即ち「葉隱精神」の總和である。

眞劍に

葉隱の全卷を通じて「眞劍に」と云ふ事は最も强調されてゐる。即ち

「武士道と云ふは死ぬ事と見附けたり。一つ二つの場にて、早く死ぬ方に片附くばかりなり。」

「武道は毎朝〳〵死習ひ、彼に附け是に附け、死にて見、死にては見して、切れ〳〵て置く一つなり」

「我が身を主君に奉り、速かに死に切つて幽靈になりて二六時中主君の御事を歎き事を整へて進上申し、御國家を堅むると云ふ所に眼を着けねば奉公人とはいはれぬなり。上下の差別あることなし。此のあたりに、ぎしと居すわりて、神佛の勸めにても少しも迷はぬ樣覺悟せねばならず」

「純一無雜に打成り、一片になる事はなか〳〵一生に成り兼ぬべし。まざり物ありては道にあらず奉行は武邊一片になること心がくべきなり」

「端的只一念より外はこれなく候、一念々々重ねて一生なり」

「武士道に於て分別出來れば、早後るゝなり。忠も孝も入らず、武道に於ては死もの狂ひなり、その內に忠孝は自ら籠るべし。」

「人の心を見んと思はゞ煩へと云ふことあり。日頃は心安く寄り合ひ、病氣又は難儀の時大方にする者は腰拔けなり。」等々

頑張れ

「大木前兵部勇氣勸めの事　兵部組中參會の時、諸用濟みてよりの話に「若き

衆は隨分心掛け、勇氣を御嗜み候へ。勇氣は心さへ附くれば成る事にて候。刀が折れば手にて仕合へ、手を切落さるれば肩節にてほぐり倒し、肩切離さるれば口にて首の十や十五は喰切り申すべく候」。と毎度申され候由。

「一鼎申され候は、よき事をするとは何事ぞといふに、一口にいへば苦痛をこらへる事なり。苦をこらへぬは皆惡しき事なり。」と

「大難大變に逢ふて動轉せぬといふは、まだしきなり。大變に逢ふては歡喜踊躍して勇み進むべきなり。一關越えたる所なり。水增されば船高しといふが如し。」

「欠伸、くさめはするまじきと思へば一生せぬものなり」、等と云つてゐる。

仲好く

「人を先に立て、爭ふ心なく禮儀を亂さず。へり下りて我が爲の惡しくても人の爲によき樣にすれば、いつも初參會の樣にて仲惡しくなることなし。婚禮も作法も別の道なし。終を愼む事始の如くならば、不和の儀あるべからざるなり。」

「意趣意恨出來、公事沙汰など致す人は、扱ひ樣にて何の事もなく濟むものなり一ッ橋にて奴出會ひ、互ひによけず打果すと候所へ、大根賣りが仲に入り、朴の先に双方取りつかせ、荷ひ替へて通したる樣なるものなり。やり樣は幾筋もある事なり。これ又主君への奉行なり。大事の御家中、めつたに死なせ、不和になしてはならぬ事なり。」等

この三性格は日本民族の傳統的情操と一致するもので、この意味から云つても葉隱精神と日本精神とは本質的に合致してゐることがわかる。

葉隱の感化

「葉隱」が如何に偉大な感化力を後世に及ぼしてゐるかは先づ吾々の耳新しい日支事變に於てこれを見ることが出來る。

昭和七年二月二十二日廟巷鎮に於て、決然爆彈を抱いて敵陣に投じ、日本軍人の勇猛心を全世界に轟かせた爆彈三勇士の一人江下武二伍長は佐賀縣人であり、葉隱精神に依つて育くまれた勇士であつた。

作江、北川兩伍長と共に爆彈を抱いて敵陣に突入した江下は勿論生還を考へては居なかつた。只だ一死報國の念願のみだつた。「武士道とは死ぬことなり」と敎へた「葉隱」の精神そのものであつたのである。死を望んでこそ始めて死を怖れない心境に達する。生還を期しては決して死を怖れないといふ心境に達する事は出來ないのである。

同じく日支事變の當時錦西方面の兵匪討伐中二千に餘る匪徒の襲擊を受け、重圍の中で僅かに手兵六十騎の少數を以て猛戰したが遂に衆寡敵せず恨みをのんで戰死した維南騎兵第二十七聯隊長古賀傳太郎大佐も矢張り佐賀縣の出身、葉隱精神の信奉者であつた。

更に當時鬼神も泣かしめる最後を遂げた空閑昇少佐も佐賀縣人である。昭和七年二月二十日江灣鎭攻擊の大激戰に參加し部下僅かに三十數名を率ひて、嚴家楷の敵軍奥地に突入し、三晝夜にわたる苦鬪を續けたが重傷を受け、不幸敵手に身を委ぬるに至り、後一人靜かに武士道に殉じたのであつた。少佐の辭世は當時新聞に掲載された通り

たらちねの親の敎へを守りてぞ、弓矢の道を吾は行くなり

と云ふのであつた。「たらちねの親の敎へ」とは即ち葉隱の敎へであり、「弓矢の道」とは武士道である。葉隱の武士道は「死ぬこと」と敎へてゐる。

滿洲國初代の關東軍司令官、特命全權大使、關東長官たりし沈默の英雄と云はれた武藤信義元帥が佐賀縣出身たる事は誰も知つてゐる事である。

尙ほ、爆彈三勇士の鐵道網爆破の後に敵陣地廟巷鎭の一角を占領し、輝々たる日章旗を飜へした混成旅團步兵大隊長碇善夫少佐、楊子江七了口に大膽なる敵前上陸

を敢行して敵の心膽を寒からしめた德島歩兵四十三聯隊長辻樣作大佐、戰車隊を率ひて熱河の山野に阿修羅の如く馳驅した獨立戰車隊長、百武俊吉大尉等皆葉隱の感化を受けた佐賀縣出身である。その他一々列擧するにいとまない勇猛物語があるが、五・一五事件の主要人物の多くも佐賀縣人であつた。彼等の一點の混り氣のない、ひたすらに國家革新の愛國的熱情は當時軍法會議に於ても認められたのであつたが、その心底には「葉隱」の敎へが流れてゐたのである。

葉隱の本文

葉隱の本文は先にも說明した通り、解釋に困難な處もあるので本書はこれをわかりよく意譯したものである。

武士道は死ぬ事。毎朝毎夕常住死身になれ

武士道といふのは死ぬ事だ。死ぬか生きるか二つに一つの場合には、早く死ぬ方に片付くばかりである。別に理由はない、腹が据つて進むのである。うまく行かぬときは犬死だなどといふ事は上方風の打上つた武士道だ。死ぬか生きるか二つに一つの場合はうまく行く樣にするには及ばぬ事だ。誰だつて生きる方が好きである。そして人間と云ふものは好きな方に理由を付けたがるものだ。しかもうまく行かず生きた場合それは腰拔けだ。非常の場合にはこの境はなか〳〵見わけがつかぬものだ、うまく行かずに死んだとしても犬死にはならぬ、これが武道の常である。毎朝毎夕改めては死に〳〵して常住死んだ積りで居る時は腹が据つて落ち着き拂ふものだ、それで始めて一生落度なく家職を完ふすることが出來るのである。

柳生流兵法の極意は死ぬ事

柳生流の極意に「大剛に兵法なし」といふことがある。ある時柳生但馬守の所へ、旗本某といふ者が參り入門を乞ふた、すると但馬守は

「貴殿は御見かけしたところ、一流成就の方らしいが、何流を學ばれたか、それをお聞きした上で子弟の御約束を致さうと言つた。すると

「いや、拙者は、武藝は一切稽古をした事は御座らぬ」

「貴殿は但馬を嬲らるゝお積りか、公方様に御指南を致す拙者、その拙者の目がねにはづれはない筈」

「いや決して」

「然らば、何事か御得心のことはござらぬか」

「左様、さう仰言られゝば、たゞ一つ、幼少の時分、武士は命を惜しまぬものと心付いて以來、數年間苦心をいたし、現在では死ぬる事を何とも思ひませぬ。この一事でございませうか」

「それでござる」と但馬守感嘆して

「拙者の目がねに違ひはなかつた。拙者の兵法の極意と申すのもその一事、これ

まで數百人の弟子中、誰一人極意を許すべき者のなかつたのもその爲であつた。貴殿は木刀を御持ちなさる必要もない。すでに免許に相當する方である」と直ちに免許皆傳を許されたと云ふ事である。

敵を討取ることよりも、主君の爲に死んだが手柄

武士は敵を討取つた事よりも、主君の爲に死ぬのが手柄である。屋島の戰に源義經の矢面を遮つて敵の矢に中り討死にした佐藤繼信がいゝ手本だ。

「註」佐藤繼信は屋島の戰に、源義經の矢面を遮つて敵矢に中り討死したものである。

首打落されても一働き出來るもの

出し抜きに首打落されても一働きは出來るものである。新田義貞の最後の如きは心甲悲なく思はれる。大野道賢などの最後は誠に武道の極致である。是非何かしようと思ふその一念こそ大切である。武勇の爲には怨靈惡鬼となつてもやり貫くと云

ふ氣で居れば首が落ちたとて死ぬ筈はない。

大野道賢火あぶりに屈せず、黒焦げになつて檢使を突殺す。

慶長十九年大阪冬の陣が和睦になつた時大阪城の外堀を埋めることになつた。そして家康は駿府へ歸つた。その後外堀を總堀と取り成し內堀まで埋めたものだ。これを見て心から憤慨したのは大野修理の弟道賢で、彼は早くも家康の心を察し『家康は心から和睦をする意志があるのではない、この堀を埋めるのは再び大阪を攻める準備であらう。味方の者が彼の心を見拔けず、みす〳〵要害を失ふのは如何にも殘念だが、今更ら致し方あるまい家康が戰の手配をするにはきつと堺の町に兵を隱す仕組みになつてゐるに違ひないからせめてもの無念晴しに堺の町を燒拂つてやらうと、道賢は風の强い日を選んで堺の町に火を放つたのだつた。すると道賢が放火したのだとの風評が自然と世上に傳はり、家康にまで聞へた。家康は自分の心底を見破つてこの樣な事をやり居つたと大變道賢を惡み、夏の陣の折「今度第一番の

戰功は大野道賢を生捕りにした者だ」と觸れ出したので、諸人は道賢一人を目懸けて取卷いたのであつた。もとより覺悟の道賢、寄せ來る敵を對手に拔群の働きをしたが終に捕へられ、白洲に引き出された。家康は一段と高い所から大聲で

「お前は天下に名を知られた勇士だが、今縄目にかゝり諸大名の前に恥を曝す事を面目ないとは思はぬか」と言葉をかけた。すると今まで首をうなだれてゐた道賢」これを聞くと屹とのび上りはたと睨まへて

「お前をこの樣にいたしくれんと思つたこの道賢だ。運盡きてかく生捕りとなつたのだが、これは古今の勇士の慣ひ、何の恥と思ふものではない。たゞ氣にかゝるのは天下の事だ。お前の樣な大たわけにはこの心持がわかるまい。」

と敢然云ひ放つたので、流石の家康も續ける言葉が出なかつた。その時堺の町人共が出て來て

「この道賢奴のお蔭で、吾々堺のものは難儀な目に會ひました。こ奴を燒跡で火

あぶりに致し度いと思ひますから、どうぞ御下げ下さいます様に」と願ひ出たので家康は

「よろしい下げてやるから手痛い目に會はせてやれ」と町人の手に渡され、愈々火あぶりにされたのだが、出來る限り遠あぶりにして苦しむ様にしたけれど道賢は微動だもしない儘焼け死んでしまつた、と見て檢死の者が近づいて行つた所眞黒焦げになつて死んだ筈の道賢はガバとはね起き、そのまゝ檢死の者に飛びかゝりその脇差しを抜き取り唯一突きに突殺し、自分はばつたり倒れて灰になつてしまつたと云ふことである。

進む者には神佛の加護がある。

矢に中らぬ様祈願の護符等を持つて敵の矢に中るまじと思ふ者には加護はない、雑人ばらの矢に中らず、名ある者の矢に中らうと敢然進む者には神佛の加護があるものだ。

佛法と武士道に分別はない、分別がつくと臆病になる。

山本五郎左衛門と云ふ人が、或る時有名な鐵牛和尚に面會して

「佛敎の極意を承りたし」と申し入れた處、鐵牛答へて曰く

「佛法とは分別を取り除く事である。その外に取りわけてこれと云ふ事はない。これを武士道の上でたとへて云ふなら、人間に分別がついた時は臆病になるものである。武士道に臆病と云ふことは最大な禁物だ。つまり分別が出來ては武勇は成るものではない」と、戒めた。

九州者は魂が一つ足りない。

鍋島勝茂公の若い頃だつた。大名ばかり數人一座した折に

「九州者は魂が一つ足りないと世間では申してゐるが何ういふ事であらう」

と冗談を言ふものがあつた、座に勝茂のゐることに氣付かなかつた相手も笑つて

「誠に、さう云ふ話を聞いた事があるが、どう云ふことだらう」と反問した。

これを聞いた勝茂はづいと席を進め

「茲に九州者が居ります、御評判の通り、如何にも九州者は魂が一つ足りません」ときつぱり云つた。

一座のものは、勝茂に出られて、はつとしたが、しかしその言ひ方が又小憎くゝも思つたので、

「おゝ貴殿は西國育ちで御座つたか、魂が一つ足りないと云はれるが、何が足りないので御座るか」と問ひ返へした、勝茂は敢然と

「臆病魂が一つ足りません。」と云ひ放つて一座を啞然たらしめたと云ふことである。

心を靜むれば敵前も薄月夜

甲陽軍艦と云ふ書に、次の様な問答が載つてゐる。何某「敵に向つた時は、くらやみに入る様な氣がするものだ。その爲か、だいぶ手疵を負ひました。然るに貴殿

は度々の御手柄に疵一つ受けられませんのは何とした事で御座らう」と尋ねた所、何某返答に、「敵に向つた時はなるほど眼前が闇になりまする。然しその時少し心を靜めましたら薄月夜の様になるものです、それから切りかゝれば手疵なんか負ひません」と。

首を打落され、同時に人の首を切る。

高木鑑房は佐賀藩でも、剛勇を以て聞え殊に早業打物の達人であつた。家來因果左衛門、不動左衛門も主に劣らぬ剛のものであつたが鑑房が、龍造寺家に背き、前田伊豫守にた賴つて居たので兩士も主について晝夜その身邊を離れなかつた。その内龍造寺隆信が伊豫守に鑑房征伐を賴み込んだので伊豫守は丁度鑑房が、緣側に腰を掛け、因果左衛門に足を洗はせてゐる隙を見て、切り懸かつて首を打落した。鑑房は首の落ちない間に脇差を拔き振り上げて打つた爲因果左衛門の首を打落してしまつた。二人の頭は盥の中にころがり込んだが、鑑房の首は座中に舞上つたと云ふこ

とである。

戰場の使者は骨一つて濟む、男振り口上は役に立たぬ

慶長五年十月鍋島直茂、同勝茂、が筑後柳河の立花宗藏を攻めた時の事、戰の前日使者大家太郎左衛門を柳河に遣はされる事になつた。然し太郎左衛門は頗る不男でその上吶辯だつたので周圍の者が、直茂公に申上げた所、公は

「今度の使は男振りや口上の要ることではない、骨一つで濟む。太郎左衛門の骨の事は見拔いてゐる」と仰せられ、柳河へ遣はされた。太郎左衛門は早速柳河へ至り

「今度御下知によつて明日押し寄せます。何かおつしやる事があれば兩檢使（加藤清正と黑田孝高が檢使の役だつた）に申し越されたい」と云ふ事を吶りながら申し達した所、返事もない間に襖一重の向ふ側で柳河の士共

「手ぬるい事を申す奴だ、立花とも云はれる者がこの際になつて斷り等を申すとでも思つてゐるのか又あの使は何と云ふ見醜しい男振りだらう、口上も碌々云へず、鍋島にはよく〳〵人物が居ないと見える」などゝ樣々惡口をしてゐた。

さて要が濟んで太郎左衛門歸らうと云ふ際になつて高聲で

「只今そちらで御評判なされた事は、よく聞きました。鍋島の槍は手ぬるいものか、どうか明日各々へ御目にかけよう、疊の上の御判斷とはちと違ひますぞ、それに拙者は、不男、不口上と非難された樣だが、武士は男振りや口上が役に立つものと思はれるのか、拙者の武士としての働きも明日御目に懸けます程に、この不男に出合ひ下さい。若し又只今手並御覽ありたければ、これに御出合ひ下され御目に懸けよう」と暫く控へてゐたが誰一人立合ふ者もなく歸えしたと云ふことである。

死ぬるばかりぞ誠なりける

或人問ふて曰く「聖廟の御歌

心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らむ

この誠の道とは如何なることか」と。これに答へて曰く「おまへは歌好きだと見

える歌で教へて上げよう

何事も皆偽りの世の中に死ぬるばかりぞ誠なりける。

いつでも死んだ積りで居るのを誠の道にかなつたと云ふのだ」。

戰場で分別が出來ると敵は敗れぬもの

鍋島安藝守は子孫に軍法を習はぬ樣にと申された。それは戰場に臨んだ場合、分別が出來ては何にもならぬものである。いざ戰ひと云ふ場合は無分別が肝要である。軍法など聞込んで居たら、疑ひ深くなり、なか〳〵埒明かないものである。我が子孫は軍法など稽古しない樣にと云ふわけである。

主人より無理さるゝ時にするが眞の奉行

中野甚右衛門教へて曰く「御主人から親切にされた時にする奉行は、奉行とは云はれない。情なく取り扱はれ、無理を言はれる時にする奉行こそ眞の奉行である。

言付けられたら畏まれ、武士の前疑ひは臆病の本と知れ

物事は前もつて遠慮してはならぬ。例へば「何某あの堀を乘り越へて攻擊の手引をせよ」と言はれたりした場合『如何したら、いゝだらう』等と云つてはならぬ。『心得ました、直ちに乘り越へませう、いゝ方法を考へて下さい。』と云ふべきである。何事を言付けられても、そのまゝ畏まることが肝要だ、總て武士の前疑ひは臆病の本と知るべきである。

陣屋での嗜み、ちよつと座るにも敵陣近く

松浦洞雲が語つて曰く、「若い頃有馬陣（島原の亂のこと）に出たが、今考へてみると防戰の場合の手柄は手合せ次第で、陣屋での嗜みが肝要だと思ふ。その嗜みと云すのは一寸でも敵陣に近く座る者は剛の者であると云ふことである」。と

味方に勝ち我に勝たねば敵に勝てない。

成富兵庫が語つて曰く「勝ちと云ふのは味方に勝つ事である。味方に勝つと云ふのは我に勝つことである。我に勝つと云ふのは氣を以て體に勝つ事である。平素か

ら味方數萬の侍に、我に續く者がない程に、我が身心を訓練して置かねば、敵に勝つ事は出來ないものである」と

敵の强弱の見樣、俯向いた敵は强く仰向いた敵は弱い。

夏日舍人は上杉景勝に仕へて軍功のあつた人だが、その物語りの中に次の樣なことがある。

出陣には米を袋に入れて持つがよい。肌着はむじなの皮にしたらよい。虱が出來ないもので、長陣の時はよく虱が出來て難儀することがある。槍合せの時、敵が手强いか弱いかを見わけるには、うつむいて懸つて來るものは黑く見えて强いものだ。あふむいて懸かるものは白く見えて弱いものである。

敵を討取るには鷹が小鳥を取るやうに

古老の話である。

戰場で敵を討取るのは、鷹が鳥を取るやうなものだ。千羽の鳥がゐても、初めに

見込みをつけた一羽の鳥以外に目を付けてはならぬ。又毛付けの首といふのは、あの何縅の鎧武者を討取るのだと云つて取つた首を云ふ。

すはといはゞ眞先、自分より先には一人もやらぬ。

永山六郎左衛門が、ある時部下のものに振舞つた時、部下に向つて

「秋津島といふことを知つてゐるか」と訊いた。

部下の者が「知りませぬ」と答へたので、

「日本のことだ。その日本秋津島は廣いものと思ふか。狹いものと思ふか」と問ひ返した。

「それは廣いと思ひます」と皆異口同音に答へたので、六郎左衛門は更に問ふた

「その廣いものを六尺棒で打つたならば、打當るのか、それとも外れるのか」と

「必らず打當ります」と答へた所、

「よろしい、その通りだ、よく覺へて置け、今天下泰平であると云つても、不意の出來事はいつ來るかわかつたものぢやない。若し只今でも、すはと云ふ樣な事が起つたら、その方共三十人を引連れ、眞先に進んで命を捨てることは、六尺棒で日本秋津島を打當てるよりも確かな事である。そしてこの六郎左衛門より先には一人もやらぬ覺悟だ。わかつたか」と云つたので皆

「心得ました」と一同勇み立つたので、「それでは飲め」と酒を飲ましたと云ふことである。

廣瀨傳左衛門十二三歳の頃豪膽人相見を辟易さす

北條安房守、或日軍法の弟子共を集めて、その頃江戸で流行の人相を呼び、剛膽の相を見せた事があつた。「剛と云はれたものは愈勵む樣に、又臆と云はれたものは命を捨てて勵む樣にせよ、生れ來る時の相は恥ではない」と一人一人見せた。その時廣瀨傳左衛門は十二三歳であつたが、人相見に向つて座り聲をあらげて、「臆病の相ありと云つて見よ！唯一刀で切捨てるぞ』と云つたと云ふ事である。

龍造寺隆信の膽略「毒なればとて何程の事」

龍造寺隆信が天正八年秋、豊後の大友氏と折衝中、敵陣から使者を以て酒肴を贈つて來た、隆信公之を召上らうと云はれるので、御側の人々「敵方の贈物毒害のおそれが御座います、大將の召し上るべきものではありません」と御留めした所、公は「何に、毒だからと云つて何程の事があらう、その使ひのものを呼べ」と云はれ、即ち使者を御前に呼び出し、即座に樽を打破つて、大盃で三度召上られ、使者の者へ御盃を下さつて、差し歸されたと云ふ事である。

鍋島直茂、薩摩から送つた龍造寺隆信の首を突返す、

隆信公の御首を薩摩より送られ、筑後榎津に參着した。これは佐賀の强弱を伺ふ爲だと直茂公は察して大隈安藝守（大隈侯の祖）に申含められて、御首を差し返した。それより薩摩では用心したと云ふことである。

註、天正十二年三月、龍造寺隆信は有馬義純が當時龍造寺に屬してゐた深江城を攻め龍造寺攻擊の氣勢を示したので、有馬攻略の軍を起し島原に出陣した處、有馬の援軍島津家久の大軍と島原城外に戰つて大敗し三月二十四日戰死した。享年五十六歳で、此の時隆信の首級を擧げたのは島津の將川上京亮で

鍋島直茂が隆信の首級を薩摩島津家に送り返したのは隆信亡き後の强味を示し、他日潔く堂々と決戰の上肥前の槍先を以て受取らうといふ趣意であつたのである。

先づ篤と身命を主人に奉り内に智仁勇の三德を備へよ

武士の本分と云へば先づ身命を主人に篤と奉るが根元である。そして内には智仁勇を備へる事である。三德兼備などゝ云へば、凡人の及びもつかぬ事の樣だけれども易いことである。智は人に談合するだけである。それで充分だ、仁は人の爲になる事である、我と人と比べて人のよい樣にするまでである。勇は齒嚙みである。前

後に心を奪はれず、齒嚙みして踏破るだけの事である。この上の立ち上つたことは知らない事だ。

そして外には風體、口上、手跡である。これはいづれも常平生の事だから平素の稽古で立派に出來る。一口に云へば閑かに强みある樣に心得べきである。以上の事がよく出來る樣になつたら國學に心掛け、その後氣晴しに諸藝能も習つたらよい。よく〳〵考へたら奉行などは、易い事である。今時少し御用に立つ人を見れば、外の三箇條のみである。

毎朝、拜の仕樣は先づ主君、親、それより氏神守佛とせよ。

毎朝、拜の仕樣は先づ主君、親、それから氏神、守佛となすべきである。主をさへ大切にせば親も悅び、佛神も納受なさると思ふのである。自分は主を思ふより外のことは知らず、出來る限り不斷御身邊に氣を附け、片時も離れないのである。又女は第一に夫を主君の如く存ずべきである。

生きながら幽靈となつて、二六時中主君を守り國家を堅めよ、

今時の奉行人を見るに、どうも眼の着け所が低い。完くスリの目遣ひの様だ。大方身の爲めの欲得か、利發だてか、又は少し魂の落ち着いた様なものは身構へをするばかりである。それではいかぬ。我が身を主君に奉り、速かに死に切つて幽靈になつて二六時中主君の御事を心に懸け、事をわきまへて進上申し、御國家を堅めると云ふ所に眼を着けねば、ほんとの奉行人とはいはれぬのである。上下の差別などあるべきわけはない、こう云ふ心構へを持つて神佛の勸めにも少しも迷はぬ様に覺悟せねばなちぬ。

註、死に切つて幽靈になつてとは、生きながら幽靈になつての意、身命を絶對に主君に捧げ切つて自分と云ふものを無にしての意味でのる。

奉行無二の忠節が第一、大節ある時は小過も不幸てない。

大行は細瑾を顧みずと云ふことがあるが、奉行無二の忠節を盡せば、外の事は大

方にしても、時には我が儘いたづらも許されるものだ、何もかも落度なく揃つてゐるのは却つて面白くないものだ。こう云ふ人は、よく肝要の所が薄くなるものである。大業をするものは、融通が利かねばならぬものである。身に大節ある時は、少々の過があつても不幸でないと云ふこともある。

名利の眞中、地獄の眞中に駈入りても主君の御用に立て

愚見集に書付けてある様に、奉行人の至極は家老の座に着き、御意見申上げる事である。こゝにさへ着眼して居れば外のつまらぬ事は問題にならぬ事だが、さてさて人物はないものだ。斯様の事に眼の着いた者は一人もない有様だ。たま〳〵利慾の立身を好んでお追從し廻る奴はあるが、これは小慾でとても家老などは望み得ぬものである。少し確りした者は利慾を離れようと思ふて、踏込んで奉行しようとはせず、徒然草とか撰集抄などを樂しんで居る。兼好や西行などは、腰拔けのやくざ、もので、武士業がならぬ故、拔け道をこしらへた者だ。侍たる者は名利の眞中、地

獄の眞中に駈入つても主君の御用に立つ様に心懸けねばならぬ。

奉公は今日一日と思へ、一日の仕事は堪へられる

生野織部が語つた、

「奉公は今日一日するとさへ思へば、如何様な事でもされるのである。一日の仕事ならば、きつと堪へられるのである。翌日も亦一日である」と

奉公人は唯暴行に好きたるがよし、心ならず仕損ずるは戰死同然

奉公人は唯奉行を好くことが肝要だ。又大役などを仰せつかれた場合、危いと思つて引下がるは逃げ尻であり、腰拔け者だ。其の役に指されて、心ならず仕損ずるのは戰場で討死したのも同様である。

奉公は好き過ぎて過ちあるが本望忠の義のと理窟はいらぬ。

山崎藏人が、見え過ぎる奉行人は惡い、と言つたのは名言である。忠だの不忠だの義だの不義だの、不公平だの何だのと、理非邪正に心のつくのはよくない。ひたすらに奉公を好き、無二無三に主人を大切に思へばそれで濟むことである。奉行に熱心のあまり過ちがあつたといふなら、それは本望と云ふべきである。とかく理窟のわかる者は少しのところにこだはつて一生をむだに暮すことが多い。僅かな一生である故無二無三がよい。迷つてはならぬ。萬事をすてゝ、奉公三昧に進むがよろしい。忠の義のと理窟を云ふことは、一番惡いことだ。

上司の事は批判せず、人が思ひ付くやうに褒めて置くが忠義

殿様の御上、御家老、年寄衆などのことは、たとひ、いゝ理窟を見付けても、人に批判してはならぬ。聞えぬ事でも御尤もと、理を付けて諸人思ひ付く様に褒め、崇めて置くのが忠義である。人が不審に思ふ様にする事はよくない。人の心は移り易いもので、一人褒むれば早やそれに傾き一人誹れば惡く思ふものである。

奉公の心得は下目な役になつても氣をくさらさぬこと。

常朝が若い頃、生野織部殿が奉公の心得に就て話された事があつた。

「首尾よく召使はるゝ時は誰も進んで奉公するものだ。下目な役になつた時、氣をくさらす事があるがこれはいけない事だ。又結構な役の者に水汲めとか、飯たけ等と仰付けられた時も少しも苦にせず、一段進んでするがよい。」

立身加増も速きを望むな、遲速共に諸人うけがふやうに

立身加増の速い時は諸人敵となり、いゝことではない。遲い時は諸人味方となり必らず幸となる。畢竟、遲速共に諸人うなづける時が一番よい。諸人が催促する程度の方が最もいゝのである。

思ひ死にするが戀の極致、主從の間もこの心で濟む

戀死なむ後の煙のそれと知れ、終ひにもらさぬ中の思ひは。

戀の極致は忍戀である。生きてゐる内に、それと知らすのは深い戀ではない、たとひ向ふから「斯様ではないか」と問はれても「全く思ひもよらない事」と云つて、唯思ひ死にするのがほんとの戀である。主從の間もこの心で濟むのである。又獨り

居るくらがりでも、賤しい事をせず、人の目にかゝらぬ胸の内に賤しい事を思はない様に心掛けねば公には綺麗には見えないものである。

相馬家臣猛火の中に飛入り、主家の系圖を腹中に收めて燒死す。

相馬家の屋敷が火災にかゝつた時、相馬殿が云はれるには、

「家や器財は又追付け作ることが出來るから燒いて仕舞つても仕方がない。しかし當家の系圖だけは何としても殘念な事だ」と歎れた。その時御側の侍の内一人が

「拙者が取出します」

と申し出た。相馬殿はじめ朋輩共が、

「最早家は一面火の海だ、どうして取出せるか」

と笑つた。するとこの者は、

「拙者は日頃は至つて不調法者で、何の御用にも相立ちませんでしたので、いつか一命を御用に立てようと覺悟致して居りました。丁度この節でございます」

と火の中に飛込んで行つたがそれつきり姿を現はさなかつた。その内に火も鎮まつたので

「さて不憫のことだ。せめて死骸でも見出してやれ」

と流石に相馬殿も仰せられ、方々探して見たら、御居間と覺しい所に燒死んで居た。之を引立てゝ見た處腹から血が流れて居るので、よく〳〵檢べてみると、腹の中に系圖を入れ、少しも損じて居なかつたと云ふことである。

純一無雜、まじり物があつては道でない、奉公は武邊一片になれ

修養に於ては、これでよいといふ事はない。これでよいと思ふことが、既に道に背くのである。一生の間不足不足と思つて、思ひ死にするところに眞の成就はある。純一無雜になり、一片になる事は、なか〳〵一生に出來るものではない。まざり物があつては道ではない。奉公は無邊一片になることに心掛くべきである。

何事も成らぬ事はない、一念起ると天地をも思ひほがす

何事も成らぬと云ふ事はない。一念起ると天地をも思ひほがすものだ。人が意氣地ない故、思ひ立ち得ないのである。力を入れないで、天地を動すといふことも只一心のことである。

病人には勇ましい軍書など讀み聞かせると氣が張つて全快する。

病氣が永引けば、大抵氣くたびれがして大病になるものである。こう云ふ病人は氣を引立てる事が肝要である。祈禱や願力で奇特なぞがあることもあり、常々法號眞言など唱へさせたなら、氣分が轉じ、病氣を忘れるものである。殊に軍書の内、勇ましい所など讀み聞かせれば、氣が引き立ち本腹するものである。

苦勞をした者でないと性根が据らぬ、若い中に苦勞せよ。

奉公人の禁物は何事かと云へば、大酒、自慢、奢りと云ふべきである・不仕合せの時はそう云ふ氣遣ひはないが少し仕合せよい時分はこの三ヶ條が危いものだ。人の上を見たらよくわかる、少々具合よくなると、自慢、奢りが付いて誠に見苦しい

ものだ、だから人は苦勞をしたものでなければ、性根がすわらぬものだ。若い中は隨分不仕合せになるがよい。そして不仕合せの時くたびれる者は役に立たないものだ。

山本神右衛門、八十歳で臨終の病中遂に呻き聲を出さず

山本常朝の父神右衛門は八十歳でなくなつたが、病中うめきそうな樣子が見えたので、側の者が「うめきなされば、隨分とこらへよいとの事で御座居ますからどうぞ御遠慮なく」と申上げた所「さうではない。山本神右衛門と諸人に名を知られ、一代口をきいた者が最後にうめき聲を人に聞かせてはならない！」と云つて臨終まで一聲もうめき聲を出されなかつた由である。

名人が出ぬのは時代の罪ではない、人が精を出さないのが殘念

大久保道古が云ふのに、

「末世になつて名人が出ない、と世人はよく申すが、自分はそうは思はない。牡

欠

貴人、老人などの前で、なんやかと道徳の事、昔話等は遠慮したがよい誠に聞にくいものだ。

物言ひの肝要は言はぬ事、言はば言葉寡く道理よく聞える様に

物はなるべく言はぬがよい。言はないで済まそうと思へば一言も言はないで済むものだ。言はなければならぬ場合は言葉少く、道理よく聞える様に云ふべきである。輕々しく口を利いて恥をかき、人から見限られる事は隨分と多いことである。

雲居和尚、山賊に遭ひ妄語したとて立歸つて金を與へ、教化す

松島の雲居和尚、或る時山中を通つた所、山賊に捕へられた。雲居は

「わしは近邊の者で、旅僧ではないから金銀は少しも持たぬ。欲しければ着物をやらう。命は助けてくれ」と云つた所

「むだ骨折りか、莫加々々しい着物なんかいらん」

といつて通してくれた。所が和尚は一町ばかり行過ぎてから、又立歸り、山賊を呼

欠

375
420

び返へし

「わしは今嘘をついた。妄語戒を破つてゐた。銀一つ前巾着にあることを、忘れて金銀はないと云つたが、さあこれを取つてくれ」と云つた。

山賊は和尚の態度に感じ入り、髷を切り、弟子になつたと云ふことである。

昭和十二年六月廿三日印刷
昭和十二年六月廿七日發行　定價十錢

著作者　内田鐵洲
發行者　東京市神田區神保町二ノ一二　上原政次郎
印刷者　東京市小石川區東古川町一四　最上常治
發行所　東京市京橋區銀座西二丁目一番地　啓德社
電話京橋　五二三一番

終